

近年、臨床医学における Evidence-based medicine (EBM) の重要性が強く指摘されているが、リハビリテーション医学・医療においても EBM の大切さに変わりはない。しかしながら、慢性期の疾患を扱う機会の多いリハビリテーション医学の性質上、なかなか EBM に基づいた臨床を行いにくいのも事実である。今回はリハビリテーション医学における EBM の現状を紹介した後に、リハビリテーションによる治療効果に関して議論の多いいくつかの疾患ないし症状などに関して、それぞれの EBM について第一線で活躍されている先生方に解説して頂いた。さらに EBM の実際を脊髄損傷を通じて取り上げてみた。

■ リハビリテーション医学における EBM の現状

EBM の定義、歴史が概説されたのち、EBM の具体的なプロセスについての解説がなされている。さらに EBM の問題点に関する指摘が加えられ、特にリハビリテーション医学・医療において EBM を実践するうえでの問題点が挙げられ、今後の展望が総論的に示されている。(木村彰男氏, 889 頁)

■ 脳血管障害

急性期のリハビリテーションの効果に関しては、その有効性が指摘されているが、慢性期の効果については確立されていない。その理由としては、対照群としての患者に治療を加えず安静を強いることの倫理的問題、リハビリテーション医療における二重盲検法の実施の難しさなどが挙げられる。本稿では、EBM の観点から検索できた 13 論文を検討し、その結果、慢性期においても患側上肢機能や歩行・日常生活機能などにリハビリテーションの効果のあることが明らかとなった。(千田富義氏, 895 頁)

■ 失語症

失語症の言語治療に関する論文で、EBM の観点からの評価に耐えられる文献は 1966 年以降でわずかに 12 件しか見当たらず、その結論も言語治療の有効性に関しては一定していない。言語治療では無作為化比較試験の実施が難しく、言語治療に馴染まないという問題点があるが、今後は客観的なデータの集積を行い、データの質を高めていく姿勢が是非とも必要とされるであろう。(立石雅子氏ら, 903 頁)

■ 認知障害

認知障害では、自然回復との鑑別がつきにくい、症例ごとに障害の程度と性質が異なる、対照群の設定が難しい、同一の治療でも治療者間に差がある、などの点から、そのリハビリテーションの効果を論ずることは非常に難しい。本稿では、認知リハビリテーションについての方法論と問題点に関して、EBM の観点から総説が展開されている。認知リハビリテーションの効果については、訓練効果がどのレベルにまで及んだかという「般化」が重要で、少なくとも一定の日常環境における能力改善への治療努力が望まれる。(渡邊 修氏ら, 909 頁)

■ EBM の実際—脊髄損傷

脊髄損傷の急性期ならびに慢性期におけるリハビリテーション治療の効果に関して、実際の EBM のステップを踏みながら言及した論文である。文献を絞り込み、質の高いエビデンスを得るための実際的な方法が述べられており、リハビリテーション医学・医療における EBM の実践に際して読者の参考になるものと思われる。(塚本芳久氏, 917 頁)